

目次

まえがき	i
第I部 序論	1
第1章 ヴォイス(voice)とは何か	3
1.1 ヴォイスに関する研究	5
1.1.1 金田一春彦(1957)	6
1.1.2 鈴木重幸(1972)	7
1.1.3 仁田義雄(1981)	7
1.1.4 寺村秀夫(1982)	8
1.1.5 高橋太郎(1985)	9
1.1.6 益岡隆志(1987)	10
1.1.7 村木新次郎(1989)(1991)	11
1.1.8 野田尚史(1991c)	13
1.1.9 早津恵美子(2000)	14
1.1.10 佐藤琢三(2005)	15
1.2 本書におけるヴォイスの捉え方と問題提起	17
第2章 先行研究の概観	21
2.1 現代日本語のヴォイスと事象との関わりに関する研究	21
2.2 現代日本語の受身文に関する研究	26
2.2.1 山田孝雄(1908)	26
2.2.2 松下大三郎(1930)	27
2.2.3 三上 章(1972)	29
2.2.4 久野 暲(1983)(1986)と黒田成幸(1985)	30
2.2.5 益岡隆志(1987)(2000)	33
2.3 現代日本語の自動性と他動性に関する研究	36

2.3.1	Hopper, Paul J., and Sandra A. Thompson (1980)	37
2.3.2	ウェスリー・M・ヤコブセン (1989)	38
2.3.3	角田太作 (1991)	39
2.3.4	井上和子 (1995)	41
2.3.5	山梨正明 (1995)	42
第3章	本書の目的・方法及び概要	45
3.1	本書の目的	45
3.2	本書の方法と資料	46
3.3	本書の構成	48
第Ⅱ部	「能動－受動」の対立・非対立をめぐって	51
第4章	「能動－受動」の対立が成り立たない〈慣用的受身文〉の位置付け	53
4.1	はじめに	53
4.2	先行研究	54
4.3	〈慣用的受身文〉と従来の受身文との相違	56
4.3.1	形態的側面から	56
4.3.2	統語的側面から— 対応度テストによる検討	57
4.4	〈慣用的受身文〉と名詞句の有情性との関わり	61
4.5	述語動詞の意味をめぐって	64
4.5.1	〈直接受身文Ⅰ〉と〈直接受身文Ⅱ〉	65
4.5.2	〈直接受身文Ⅰ〉と〈慣用的受身文〉	68
4.6	おわりに	71
第5章	動詞の意味から見た受身文の多様性と連続性 — 「打たれる」を対象として—	75
5.1	はじめに	75
5.2	意味による「打たれる」のパターン化	78
5.3	受身文の述部における意味派生 — 「打たれる」と「打つ」との対照を通して	84

5.3.1 「打つ」の意味	85
5.3.2 「打たれる」と「打つ」の意味的関連性	87
5.4 意味から見た受身文の多様性と連続性	91
5.5 おわりに	93
第Ⅲ部 事象成立のあり方から見たヴォイス	95
第6章 事象成立のあり方から見たヴォイスの対立	
—受身文の否定の意味解釈を通して—	97
6.1 はじめに	97
6.2 事象成立の定義とそのあり方	99
6.3 事象の不成立を表わす受身文の意味解釈	
—《未成立》か《未生起》か	101
6.4 構文の意味機能とヴォイスの対立	105
6.4.1 能動文の表わす事象の成立・不成立の意味について	105
6.4.2 動作主の視点から見た《未成立》を表わす表現としての 実現可能文	109
6.5 おわりに	112
第7章 事象の達成点のあり方をめぐって	
—実現可能文と無標の動詞文との対照を通して—	115
7.1 はじめに	115
7.2 事象成立のあり方について	116
7.3 事象における一次的達成点	
—動詞の語彙的意味に内在する限界点	120
7.4 事象における二次的達成点—連用修飾成分	121
7.4.1 いわゆる外的限界	121
7.4.2 行為の結果・様態を表わす副詞的成分	124
7.5 おわりに	127

第8章	現代日本語における実現可能文の意味機能	
	—無標の動詞文との対比を通して—	129
8.1	はじめに	129
8.2	実現可能文の表わす事象と〈意志性〉との関係について	132
	8.2.1 実現された行為と主体の意志性・期待との関わり	132
	8.2.2 〈意志性〉と事象との関わりについて	134
8.3	現代日本語における実現可能文の意味機能をめぐって	139
	8.3.1 実現された「一回的な行為」の特徴について	140
	8.3.2 事象のあり方から見た実現可能文	143
8.4	おわりに	147
第IV部	事象の生起に関わる諸要因から見た自動性・他動性とヴォイス	149
第9章	事象の生起に関わる諸要因から見た自動性のあり方	
	—自動詞文・受身文・自発文を対象として—	151
9.1	はじめに	151
9.2	先行研究	152
9.3	事象の生起に関わる諸要因から見た自動詞文における自動性のあり方	154
	9.3.1 自動詞文のグループ分け	154
	9.3.2 自動詞文に見られる自動性のあり方	158
9.4.	意味的側面から見た受身文と自発文の類似性	159
	9.4.1 受身のあり方から見た受身文の連続性	159
	9.4.2 受身文と自発文との意味的類似性	
	—自発のあり方を通して—	162
9.5	まとめ	164
9.6	おわりに	166
第10章	事象の生起に関わる諸要因から見た自動性と他動性のあり方	
	—受身文と能動文との対立を中心に—	167
10.1	はじめに	167

10.2	自動性と他動性について.....	169
10.3	受身文と能動文に伴う自動性と他動性のあり方.....	171
10.3.1	能動文の場合.....	171
10.3.1.1	事象の生起に関わる諸要因による能動文の分類.....	171
10.3.1.2	能動文に見られる他動性のあり方.....	174
10.3.2	受身文の場合.....	177
10.3.2.1	事象の生起に関わる諸要因による受身文の分類.....	177
10.3.2.2	受身文に見られる自動性のあり方.....	181
10.4	自動性と他動性の観点から見た受身文と能動文との対立.....	183
10.5	おわりに.....	188
第 11 章	事象の生起に関わる諸要因から見た受身文の「に」「から」「によっ て」の意味解釈.....	189
11.1	はじめに.....	189
11.2	先行研究.....	190
11.3	考察対象について.....	194
11.4	受身文における「に」・「から」・「によって」と事象との関わり ...	197
11.4.1	事象の生起との関わりから見た「に」の意味解釈.....	197
11.4.2	事象の生起との関わりから見た「から」の意味解釈.....	201
11.4.3	事象の生起との関わりから見た「によって」の意味解釈	204
11.4.4	まとめ.....	205
11.5	受身文における「に」・「から」・「によって」の位置付けと自動性 との関わり.....	207
11.5.1	受身文における「に」・「から」・「によって」の位置付け...	207
11.5.2	受身文の「に」「から」「によって」と自動性のあり方との 関わり.....	210
11.6	おわりに.....	213

第V部 本書の意義と今後の展望.....	215
第12章 本書の意義.....	217
第13章 結びと今後の展望.....	223
あとがき.....	227
参考文献.....	230
索引.....	239